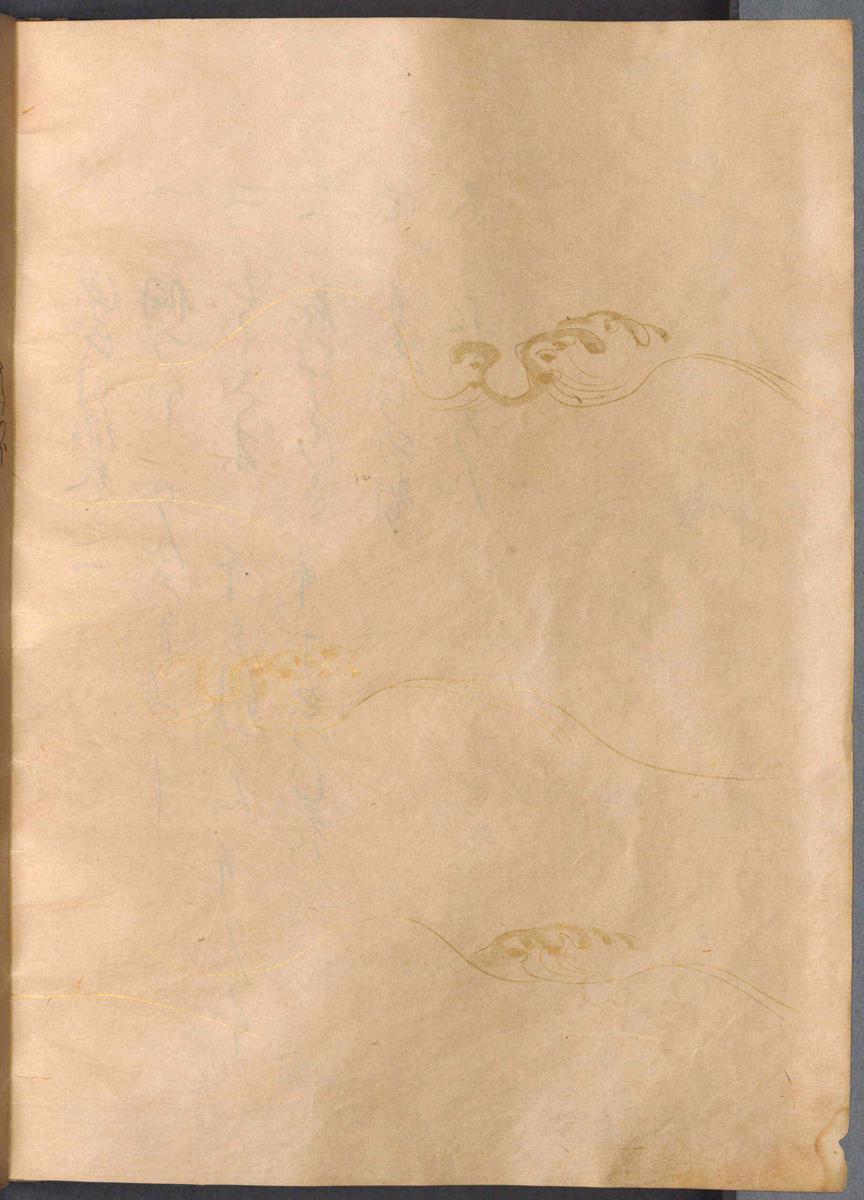
源氏小々見

源氏目録巻之一

一　桐つぼ　せんさいたいつぼし
二　もくさ木　并　うけせん　并　夕かほ
三　若しらけき　并　すゑつむ花
四　もみちの賀
五　花のえん



一　桐壺

桐(きり)にかといふ事の事大内のうちにまゐ殿
乃名なりしけいしやと申ハ桐つかの事を
じきりはかよ光かんしの御母さつ色をふ
さてこそきりはかのうゐと申かれば
うゐ一の人なんとのにしもちめまてなし
父ハ大納言まて共(うせ)ぬし人のまなれにさ
ち名なりさせてありて御宮にへ人に内
ゐまつりをひしそうし御門とのかまと
きめ也給へをかゝへの女御うゐこゝを和

そこ〇こ語ふさら程よけうゐれに服よわ
うらやひとしころいてきさもまふたなし
用とそれより下らうのかうゐうちまて
面をうちすあさ夕こやはん人ふ付くも
人のんとのこうこうし服をかふつりり
しやまをんけ女三りなりまふ夏のけ
御母うゐくれまふやまひかきりなれハ
大内のうちまて人のかくれまつるなれか
まはにいと聞まくさと人出さもまふせあ
くにらさしのせりなれハてくにまれせん

しと語りて出すふは車いとしきくハ
きくのすなれをかりつきれ人すはゆ
なされさりしとおもりなるゆへさしる
ことそのおもひてとも
あつしくなやましすいとも若しき事
おもひさりうれハおもひさしてハかきりのたひ三位のうゐのちくし
ゆへさしなり
ゆく大内と出すひしおりに門にならりおま
せすひてさはくのことのこまへてもそこく
まして物もかはらさりしか斎よ

かうりとてわりてみちのうりしきふ
いつ海りしきはいのちなりまうと
是はかうゐのうゐりの弁をし御ふれまく
ゐらは貴ひきのくらけまもなきましとも
同めしたりまうしかうへのそ○をも
又よれそしうとをかりしてうやくのちさ
うの下へちよくしとなりて二位のくら
井とをくしやまふかうりのひつひこれ
なりかくて秋まもなりぬかのうやまし
かうゐの母もおりしを因まさつしも

侍しり若宮にいつゝのをとこされはまゐらせ
まつりてさしにもとまうす風のつまさそひて
あはれなりて夕くれなりしに月のかけ
たゆけはひのこゑやはらかにて女房とゝのひ
よはひのやまなるさ人のあはれかなさ
とゝめかねへしそれかよのことふ
かへしくて　思のまゝにけり　らくし
雲の上人（若宮　桐壺更衣）　こゝの小萩　涼しさの風と
露おきそふる
これはいかにねのさしめくの車をれなさき

人の面となしてつゝみあらいつけさ面ゆへ
しにはしりのにつゝまかうゐ八母のりし人君
ゑやのにしとよしまひ山に并
ゑやさのゝ君ゆさしまふ風のとしふ
こゝれかりしとおりひこう面き
とよしまひしなり相このにつゝひ相りを
ゐとくりゐまかうゐのおしとれうて
うしゐくおとしりつゝしはひそりし
なりかうゐの母あらさ風ゆやさしけ
ゐれしりこゝれうへそしけんなさ

人なとはゝ聞しかのうゝゐの人まそ○ま
きくうやし人なれもそのこ行○も居也
源氏七の御しよりは文もしめありかくれ
しかふまひとふ志の孫まも雲井とひか
をなふ事まも人まいことなりその法
うゝらいよりもゝ也ゆゝりそうに此文と
さうやしなかのもゝ也此文れはうちの光を
面さうはしをれいしそうにめてゝひるき
みとつけそてさわりしよりはみんしを光
源氏とつゝなりその御とのことも

文徳天皇 在位七年 御年三十の 年七

かのみかとの御子ともあまたおはしけるなかに

まの尼つちりかんしうぬうゆりきうちく

初めしゆひ　うきせしうき　益の給ひてふの

ふくうりかり　とをきうとる

あけゆきうり　かんしのしうと　給ふ

されま　在人よたり給へいまてら　ちん本のゆきのきさよ御年付まふ

かんしのきうん十二まてかんかくをも目み

みなもとの氏を給はりて　たゝ人となり給ひて

ゆるひろ かんし兄なりかのかんかくの目ひき

つきの大臣乃むしらあはよみとりうひまてあ

をやみてまうりたまひてそのあした大臣の
めくおりしまうてられとおつひのとゝまり
ゑしゆのゝきよしとつみはい文なと
つかはんかてのかりこしいれとつゑのひ
らくゝめくりしゆいとゝつ事
ゑれよしもそうるなりよみすひのよ安
大臣のいさうれはあり給まゝうてにおほし
おやなしつるゆうそのんやとはりえ
なかなをかいかりまつりとゆいうてする
よはくなりて文はしめより日の文をかへ

あつかの青さんのうすなりけんしのまゝ
母なりこの后はけんしのはゝかゝゐく
きてのち御門おりしめしなけ也まひ
くはんなくさ御を年月ゆれともわをれて
をおりしめしおしさまおさ也まひて
もあくるをしらしとおりしめしくるれ
むなしき御家もさひしをしたしく
うへの女房たちのはつりのもとさ御く
はしのみもなし雲のよもなみさりくれ
なとなけ也まゝ明くるみしの御さ先

よりいそれりしまれ日の文にうらら
らくまくせし名をくれし御と姫君
としはさ御母君されるこのいとしく
せしさ也ゆふとなりしのとけとのといひ
し女房君とて出しあしやふ御うくる
けんもなくさまやひくけんしれう
のよなら人給ふなんしとひろ君とも
白は姫文に御くやまれりしまやうに御く
日の文とられ人まりにつり〇は夜にか
なりこの文をなんしおさなくらうとおか

まゐらせ候ふ事あるまてまつりてはけに
ものひくふ事ありまひくに子一人出さまふ
まいせいかんと申せしいけにるなり又桐
にかの門とかんしの又門とも申せ
まとりかんてまふ事上まてまし因せん桐
つかの門とかなりをとへさてまつる門
しらせんきの門事とかんてをりらく
くんかへし

二　帚木（ははきき）

はゝきゝとはわかき秋のおもしろきといふ事なれし
の名はおもひしてはくかへよ大内のよの
わたくしありかゝりふ風と心つきしかなく
さわりなきところなき中ねとはやうしい
源氏の御とおもしろひのとおもひあひより
かの君ともすてのこととは式部といひし
天上人集りてくさなれすきおもひそれ
おもひふりかはせてよ人のしるとりらよ
しれしとそうあきられとうつしの事はさ

すみといふそのはれこしき
二のまち つちのこ ちかゐかり 文字のしもあり とゐさき かゐかり
ひらゐらくせ なそしこ とのゐ井ねの ゐかり
らゐいゐかりとち済えへし さみてゐかり よはへし
てとかりて こくれ也てしゐのゐ ゐかり
御書ふちの中ゐのゐかりよむうつの
同ゐのえれ年となそしこと かかりし
さうりは少ゐのらえうしゐかりふな
てしこといふ中わえ とし むらくゐも
ゐこのことさへ代月也 苦ゐなしてかいかへか

なにはのまゐりとかいへいつくしらぬと
らりは尼李よりこそも人とつまかる也
楓門のみのいつくしうこそへ出て花色
さんとすゐよせとつ方よりてこそ活
いふ人のいよゝ命をしひしかのこ人にあらし
てこそかへありかのあはれしたらひ
うしとまうけこそかへまいへ給へし
なかりそけ　さもしられ　すくれはあと給へし
いよのとはりあはのなかりれやんすいあこそとありし
ろうりしゆへよんゆゑにあらしてこうへあり

き梅あるしのいまのとけは君のおもし
まを御うさふ御とのゐしうふかんし志
のひてかともの孫うあへおもして立さて
志さまへは孫うとしろいとちくてまう
御うへとをいひまう志けまう御とまの
ひ入てとくのうふまとんなおもひけと
おもひて

うとなしねぶも屋まおふるれうさに
あうまもあらはきゆうもくさて
とうしゆへまとをはまをとうさくとは

いひそれは人にわしかなともおりひあり
そろ人にていよのすをなとうはまとあ
つき人にはあらしともおやもなくてゐあつ
ふ人をなけ見におりひのかうにかくてゐる
かう語をひきしてよみしかりそ
とくいひてかのうにあふそのまくにて見
く立より語ひしうともはせまみをあひ
そてまつしをつよくそんしにはんけし
まありひまひまうとうやすゑのよまても
わとれなを語をくいよのをけそてのら

わまりふなるまそりしとむらへまひて二
条院のひしろそいまつまやきさい
よのとはうあいなりかはまとりなりと
の京極川なりかてかへまはゐしは相
こりふなそしことむらへとこり
出と車とうの中ねの相こりなりむ
まのうえう相こりまはまりかよふ安房れ
もとへりともしらの屋うなる人うらひ
かとしたしと大内より出るにはうへ
車よのりてゆきとうふといはくそと

おもふる我ゆく末なり後まして おもふるこの
おとこ笛をつきてそくのうゑ内よりわこ
むをひくこの面とふきくもみちなと
ありもかなり

ちとれ称て月もえるまの面てなりし
所きなれ人をひきやしめられ

とよしそうりそれより此女のりとへゆうを
されもそれそれもあらんをんなふんなく
うゑすへとこのうんさちまやそりしなり
又とう乃中ぬのなそしことかたり給

ひし毋夕かれうへりちのひくおうよ
ひくいとあさうさりしにおさあさへさへ
出きてこのよ一とをわりんひりしにうはし
きれの方乃うさりとそろしきことを
いふときてかしりなるおよくれてあさ
ことあるときこうの君にいしそうにはし
ゆき姫ミうんともせをうらなみさくきて姫
きうんのはしとを
山川のうれかあるともわりくうり
あれいうけよなてしこの霧

とうのくさのうちに花なくゆきかれら
とかうち出てもなくこゑそりは
人そりータりのきりうんしよひく
なふしのかんしてちかさなりてこい
もりつなり十七のきよんこそりと
ちこふのもりいろのしるのかく
しーよりこゆさそれのもりに
ひしてちこいうのこいらの月
のこりつしてこれよりてあと
そこそり六月のうしのこいつのもは

うあさましくかたくしなまことそむ
ひぬるゝめとおりひてかつりしなりしき
うり哥より
ひかふのうるまひしるれなくれり
ひるゝ風とくせねいつゝあやなき
とよめりふの世しる
あふことのよくとしへそくる中なしい
ひるさもなふるゝ風をゆるまし
とよめりそのまゝゆるとまゝめくしき
人いくはさおもくしをむつしく世中

乃御ふ面うなしゐとこわをうらみさきて
しまりしらりいとゝかんしい人面なき御
ふいて其さ也まゝとうやひるまゝくせと
をこれなりくりしまい

もくさく

りまを

かんよう

なり

宮蝶（うつせみ）たくさ木のならひ

此事をとう川せきといふことをたくさ木の木の
うたかへの時いるのとけり女と申んしてお
かをわをれぬことにおりしめしくがの家乃
屋りミ川おりし詩をておもうる又れ
うもとへおりしまをあつし屋りおのめいか
をとらろうふさをとその家も女のひを
てまつらをしなしくかつりまふおほんよう
りをていふしていひまくましとおほしめ
てりの女のおとくいまる十二三つりのまゝ

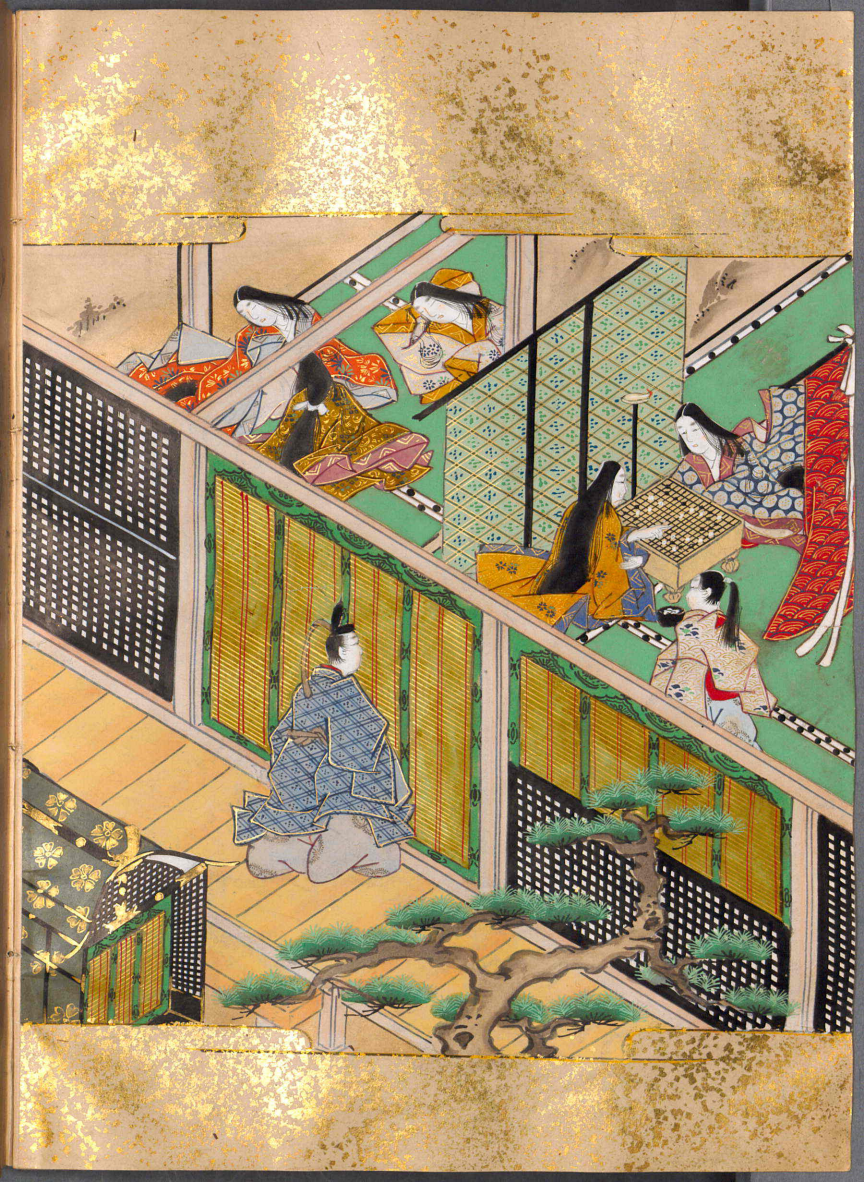
まてあ〇のりとよありしをめし出て
屋りく天上させく我門つ忠人なりしくい
とともしんつくしまふ人それ門心をたれ
いまいはくりしかいひたるせひてこのこ
きみを門つひまて門つきありこそ後いよの
ちけぬるり人ありて人をくなくるわり
このこきこをつまさせ治く一車ふめしく
かのなりくり人まりまふこそ人はいあるかき
人ありきるとおりひされは源氏は門車乃
内よかくまく人をつまりてのこきこをたる

ねそのこゝろみしにはましけれ
めのみしれるといふことこそかたう
そのほとのことし　碁うちはまさ
はかりことなき勝を　一度に
とりしひやかなるこゝろん　十にと
おもふ　二十にさ　四十にさ
こゝう
これは山桜のこゝろにあらしのみはなき
碁うちてつかさへみなありさて碁う
ちまてのゆくもおさとゆるしても

まろ殿よこのひとをもてなすかの女はとけて
殿ばらはいとらくらくとうちとけてとう
くまゐられぬるしるしとて殿ばらはひと
めのうちとけたるはりをそれいとまとい
のらしとてうちわらせたまひのりをはく
らねるうちあしうそうらんなりとこのひと
めよりのひはひてはとうまりかへまれわ
まうとひのうとかへりてもとまゆをと
へのはのうんとうりてうちうやまひし
うもりとうりぶんとうわうとれいへもわひ

猶つとその後一よの情りわたの物とし
とかといふ乃に哥あり
かのうせしのこくれ物ともしえすれ
露乃うしとなあつけまし
返し
ほのめかして風につけてもしたをきの
なかはゝ霜よくへりきよきり
返事もよこさあらしみてありし猶よこ
の人とさへおとこともわくのかたくもつ
まくしんなんの事もなく一夜ふしたに

もはまへしおすしすなるへし相にはさ
しの人ゆきとはさつもしきゐとりて
うつりすゑのことも
とりて相すさゐ（はまその名なり）　人まもむ
相そのわしさのはつきあり
うつせみ人をかへてかり事のもとも
なほ人かのなつしきゝ邦
さてこそうつせみとはいはつをかれこれは
こる夜のまなりうつせみはいかにも人さへ
一夜のちきりなしひさあらせてはくへし



ゆふかけ　なくさの
ならひ

はまをかけとゝ申ハ云葉のこゝやを取と
ゆゑしハせんとうとくとうくうしてか
くれをひしこゝやをとゝろ云葉あるりま
いて面んをなくてかるしましきこ
きは桐つかの門の門をまてたりま
しきとうくうしてくきをひしかえ
いとあへなくかりしめしく姫宮のた
るし内をともうらの見えたくたほし
めしかりけこゝやを取へかんし思ひ

まいりまふかりけなきことよの人も
ありひそてうつろしたくかよひまふ所
お家なる所りゆふかのされしつまろ
こい名あり内ま女房ともあまたよし何
つまくすめるしきうけまんてなり花
そんくきの事なりとの中ぬれて
つまし法姫君のたくのくれてぬるな
ところなりあるゆふくれまいれ出家あ
そりの三のひありさまに車とうそく
なかのたるれ何く咲てあるをなふれ

よりてこそうきうとも見あだたうれり
かのくゝ見ゆる花のゆふかな
いかふも夕かなに人をうへうくいあるまし
さてこそ夕かれ君といふ女房をゆふ
かなのうへといふくてゆんしのめれとのこ
きこゝろりおかやはをてよくく東国さ
せくときくおくしましぬこきとれ
中ぬのうりしなてしとの母よやと
あやしくおりひなりあさうしをかよひ
給ふれとも秋もなりぬ八月十四日あらつ

さふなふしのゆんへつさなひのつさを
我いりの小家りとまり給ふりとな
里乃つゑよめさましてさしたしとか
そをしつさ我ちりなしてすなそ乃
かとのことを

みさけさし（たらいそうし）しひしろ我（女房のうろあの）
かうとのとゝとりぬりけく

これ夕かゝ乃小家よはをさせのふへし
さてもこゝをさうしよろくしたそん
とありむとうせのひてちゆりせい夜れ

そのとりしえさとたへしちとより
もひきくてこゝの世と祈りひて千年
六かく七百万歳と祈りしめきりや
うこそくとこなおみちとあへく
らんもてうれちこりそてつる
あさなりりそしちこや給ひしよ十
六日のうちよさにかひしそ由に
あれなり极十五日のありきひとり
車もてなふりのかんへつきたしや
まさのくめ八かのすりよ為八ひりや

いうことの法へも

ゆふ霧りしひもとく花ハ玉かこの

そとりまつ人しえまとそ見れ

四五し

ひりわりとみしなかれかも霧ハ

そそかれ時のそらめなりまり

なとしひかして十六日一日ハかれなふ

しの院のわきろまおさかしかたひ

てくしまふそのことも

しのめいさなひしわつさ　しりめ

はゆのひかり　　むなしくる夜
あきくる夜と　　水さにしりる池
けるうら　よのあれといふん　　なふしのあんの
つるうら　　ふせい
とりのかしこ思　なんのすさへ
すさてとゝろ　　そしりぬきハ
いひ夜ろうさなし

まんしに太刀とゆきてねすふ物のあしと
とひしくとなりしすりこれらも心え
てはきさせすふ夜し板いふせんとてこ
きこれとめしてあわせあらせてきよ
こつよこれこれかちる人のきつくひ可

さかりとうりてこしてあるたきうと
うにしりよとてこそ出たしかこ
かきをくめしわたりこの車よかた
へうんこしをこのりそひ
くゆくのらのひあるもうのこ
きこそこそうもいつこそ人はき
つとこそ那とへつこそこそうんしわより
わへなくわこそくれりてこそ
とりこそして語りて行こそ
こと行んしていこそ行ひあるこ

うちうりしをひしまくとりつくしさ
きはまりくれなすのにそのまくさくつと
し面新いうるんらふかりとうへさしろ
ミ入也をひくかつ也をひて面うくにしき
いなしとにしくまれしましてよの
えけまて秋のすゑまそとこそりはひ
し内ことふことなりなりかれたをとは
いそれとくなまくりしよせて此が
称なしていと称んとうまたくまも
をひて此うも也をふうくうふ気くろさ

女といふこれなり皆よむらつの恵り
をいせまてゆきあひて六条のゐんへ
まうしまうくまつりてはれうこまさふ
ひしなりきんしもちくしれおり
おりして

めしはひ

人なり

三　蒼紫（ワりしきさき）

このまゝワりしきれといふるしきれの
うへのおさなりしとよりんのひ言ひ
もにつてゝいはしもうんしきれの
祢りかよひまゝ婦人のまゝくさ
とよりんのひしゆへまなりワりしきれ
といひくおさなきんなりこれいはん
ましまくの夜つかの夜とおさなくよりを
ふりけていふしてしゆうさなく
人のことをひるんすれも我はひんやなく

さしてあるひしゆへなりなとひを
よあらぬ世中もうらめしくたりしめに
ふけしらされ乃上ハ此後つかはしめい
りてたゝしまゝハさうすくふさゝ給ひ
しゆへ和のゆりとゝしらされ此事の
ゆりなとつゝ事なれハよそへてよそ
をひしゆへ此事とはつゝしらされしか
まりことさらしまをたりしろを作りを
つまとてこそ式部の君ハしらしさ志さ
うらん付さゝまつりさてもこの君と御覧

し初くなりに世のやりとなるこの人
ゆへ雲うくれまひしことはまんし十七れ
にしにはいに屋(おこりのうす)として小山よりそうと
きひきりまとてめしまれとも家人は
出ぬ事にてまつらせにつとて小山へ
おもしさきをかれひしつまからしまて
まつりそれはおこらせ給ひとすをのこ
つまおそ給しとて五日とまりまひて
にうらよ田つりまふにまくなれは立出て
寝りしことのそれにはんとれは母房れと

おもしろきたゝに事みえてはかり
くのそゝも清へしかのひめ君のうしろは
たらりおもしそきひとつきのはてしそ
うつのおもなりこのうし君んなるこそみふ
なりけるをきゝてやんとてこの山よりはかりし
ましきわか小姫君とそはきておつま
しそるとのそこそゆんしそし
めさものふをのしてし

こしきうれ　よそれのかさらん

いつは風さおらり　ものやさちらへのふかき
いふ

かはかみ うしろの山 とさめれて
いはき人のか 山のあはきさかり
まろのとかいそ わくさとせゆのかな
きまひ称かそて きれれとと
こゆき称かし 川のへに
菊さくふれくるつや くさしろ
座りこ川 なのそこまそか
つきまと心ろにりてなしぬさくるなり
座きのまり おもふ衣く みんかはみやそ こんとゆき沼
ひしらりもなとろくしたり

これもちりにおなじ人のてなるべし
是は小山にての事なりけり
法しにきこえし人はやんてい(の)のをとの兵部卿の
みやのおほむあそびのついでに貴なれはつゝはかまの
はかまは小山よりたてしゆゑしてこれの
うへのうれみしもあかなりけるをよ
まつはてうはとくきてあうしさみ
まうそてゝきくはしめろ
なり根この姫君のつくしいてゝけら
とのゝこそへいかしくうらこきよれく

てまつりくわりにまゐらしつきそて
くかの所にさんまもまゐてまつらんと
ありしめしくかのそうつよとひそてま
ゐりまゐらしも思ともつひよりなとして
此井よその年の九月のひうも思り
とく生て京の殿よかとりなりと聞ゐよ
ておりしまゐとゝりそてまつら物
をひて二条の殿のまゐそひよりは
しさてまつりりてなしかしつきまゐ
五十の所としなりかのまゐ御しして

小山人おもしまやしころハ三月廿日(九十)より
さてこそ京の花ハさりとれて山のさ
くらハまさかりとはいひそれ又小山
よすゝめといつてとゞくなことゝれハ
ゆきの人すゝめの子をとひまひしをね
さといひしまゝハふりしそりしをし
ゆきの上いつておしをてなきまひし
ゆとうさのいとうゆくしかりしを源氏の
君ゆるんしそめてまりかしをといつて
もありと人いつてもあらまふへしとかの

みきつうしとめりまとうとあらへ九
つんしかの納言のあれといひしなりけり
のへたといふ文
紫上源氏にもあへとも見え
見えぬ人とのみ郡と源氏す
源氏しう也
式部卿のしくさのしろ風りぬいても
井なしいつす是いそつのそへ分ん
しとひそそつりそをうけくさ九
とりりしこたさふこそまうけ待りめ
とりられそうたりいものそんはりを
きんの事なりられなしをいもめとんは
しやきんの事なり文こそ侍りしよ物

こりといふもありといふたありしへか
らとて御らんせしかはりよ人て意生くとや
くけんするもつともおりの縁生ありける
ともの人もしのやすふしそなれはしたる
ありける帯りとめいたまれいまし
そりこと時ありしぬとのいとともそて
そう縁にそしくゝ又せしくぬ上三条
のかんへせんそくいわりく日にあれ
それとこそくりしてのありくせ
九月よけりし是よくまて十月よ源

氏のとりをてまつり給へはいまさにうし
ゑ乃にての中なきともはさしあ
をもうり日いろのうろをうををてま
つりうろうとかかゆられとゑひしより
といふなりかくてにんさしなりぬさ
なくてかんし五十三ひしらにさへ八十
ありてうくきまふかんし雲うくれ給ひ
しをこ乃なけきゆへなり雲うくきと
をにしんせいのきしなり古人のまゝる
ゑてうり

末摘花（すゑつむはな）　まりはしさんのまひ

此事すゑはしの花とつゝるのひさらの花と
ゆゑつゝる文なりしまりしさうをまひし
はめしよ姫君一人のうりておろしきいと
うとうなるはすまゐまてなりめすし
給ひまりけんしけはへさをまして申し
くなりしめしく鶴をてまつりまひまる
りまんしのはめれと少ねのうゑふとて
内よさつしひまりけ文りまうしかを
しまりかよふ人なまはこうしまうへしてみせ

そてまつり侍りしをなりひのかうふれ
りけるはなしまうこれにつらき色な侍
ものしそうくゆきわくさえしくよ
たえてしまうりんそめそてまつりまへ
きやうしくたりしまれしはとことの
我なしてのそれしうつきてまつりんと
あさわりたわきうて人のゆりしてひそて
さくつくえりしおかれて後はいさく
のとはいきて二条のあんひしれそへ
はすまゐゆしのふまんし

なつしさ又ともなしふなあこの
すゑにむ花とそてりかれかん
とよしのひしなりくれなゐ花のすゑ
あらさねなりすゑとつゝてとらなりこれ
ゆへよすゑつしといふ花さしさおり
りにかかよあらさこのことはをろ
ことしことにかくれしさかたらぬき
そう人こきなりし花をんすくかりひ
てあつひのよろあるのとうの中ねもん
りをて源氏のおくしまもとをんあらさ

ひとてあとまつきてゆきてはせよ
見あらはしくそのうさに源氏の御そてを
ひかへてとうの中ね
もゆるもふ大内山ハいてにまと
いろうさ見せぬつきよひの月
二月十六日のるなりは姫君さんのことを
ひさかひしなりあきうる屋とのちうり
まひ人主のつきよひもろともにおし大
内山ハ御くへしかたさぬ上思はむ花り
はくなしとうの中ねよハさしことなれ

四　ゐ蒸賀（もみちのが）

はまてもみちのうといふ桐（きり）つかれは門そのは
乃のむれは門をはとめまふところは十月
なれはもみちともてなしまてはかりさ
てもみちのうといふゐ蒸れちとまてまいた
むかりちんしやう人文ちもそのうちやう
そうはまひまふそ乃をうさかんしのせい
かいをまひまふまちくはなしうつ
ゑ事をとへんさなりしかしてはは
ちうとこうれ中ゐまひまふかんしまは

まとされてあるへきつの深山木と
そへてしかさしのみちつくちりすさ
たれかのれひよまとまはれいたぬ
さらくはまへのきくありてうしかね
まふゆすへれとこかく尾きてそ流
さしきゆとなりそつもしし
さしかゆきさく　ゆきまへ
わしかて　かのわひ
末をそれよみち
楽ぐはやいひえたりあとまつまんへなきとけ

つまさらぬるはをくといふ所あるとこ
まりを川あるやにをまふなしその夜
夜つかのうやへいんしより我まひれとり
さともにんしつらんとかりしく志ひ
くにつきあり
地わりふまそらまふへくもあらぬ力の
神うちかりしそろしつまさや
とよりんてそてさつりのふ迄るまる
かゝ人の神ふることはと我れと
そらぬりはをてあそれといふさ

とをりしたりける人の御むすめにておはし
ましのきしやうひとつをきさ
かいや殿はまゐりなつかのはゝは御
ようまれまいてまさはまことにいみしの
御子なりてなにしけれはれはむれともたる
しめるをもひなされあはれして文
いてとうくにはみつ十一にて位にゐ
はりせりける治世十八年なりけれは冷
泉院とやのちのきこえし
なそへして　いまゝきこえされ

これ世の中　むかし色このみなり
見はしまさりしものはよくおきなし侍へ
うとはしまさるよしをうしくしなれはしたりきて
みはしまさよりんしうらの女房りんかり
のもけとついてさくら年五十七八の
人なりりんしは十九よなりほうみの女
房なりをいふれかみをまこしらし

むかのあや　わうさ
ひるみの○　はきうやきえ　あのなかり
ありまわうくふ　らんかいてん見たハ

ひと　ゆふ立

もとうしたれそうなるうりに四ぬとうれ
れたしまとはのくるはしをかんし
そくすまてあつまやうたひくうそふ
きかふまはかん四ぬのとけひとふ
てかひ志へて居たりしあへ立より結
ひくわつひかたしかふ板うらのうへはまつ
つまくしたてくこまをはるんしてまう
ものかふ四ぬのもとよりおたしそうの時
とうの中ねさあひてかんしの兎をそ

又　花宴（はなのえん）

はなをたれのえんといふ中にかの和葉の旅
のはさのとしの春大内より花のんあり南
殿のさくらさかりに花のりとりて此あそ
ひあり髭を結ひて文さらに二度上人
ちけよつうまして詩を作り結ふ中にも
りんしの所にしたしとのとうの中ねは春の
うくひとる人にはるといふ髭を結ひりし
なりこ後古の人のりみちのかのまひを
かりしのし出るをもひてそ乃ことゝ

くう朱雀院なりきんしまはあふせら
りせめさせ給へはいんしをそらてまひ
すふとうの中ねそらくつまうくをしんと
まひしらおりしろさまはそうつをすふ見
後代のまひとなりぬへしといひあつりさ
まは後のるはそめしなといふ事はも
前まもまひはくるしかりましさてを取
けんしさりぬへき陳りやと思いの故に
かのあつりと云のひうしひそしすあ
つまさすふ用とまとうき厳は二のくらる

こちまゐ間よりつゝき女房のこ出れなへ
てあこ出ふいわてあかろ月夜ま出
身物そなきとなりあし程まゐれ
いとありしろくおりしていひよりてい
人ゆへそうしを面れまゐれのうりしは
い女房はとうくうの御母こうきてんれ
女御の御いもうと云の出とて此う
くうりしあり語いんとてもくまれ
しうい花のえんのまひ御ふんれ為り
間へまつりまひてとくまり語ひうへ

あつさ[illegible]さしよりの[illegible]しひのんなる
くんねまひしその[illegible]れしとぶ
三のくち　あつさ[illegible]
くされ[illegible]　霧の[illegible]ゆりイ
[illegible]　[illegible]月[illegible]
なりしのこ
うれ[illegible]
くさの[illegible]とはとりしとやはり
りんし
いにまそし霧のやりとりしよ

こさくかたらふ風もこそふけ
とよめりけれはあるまてよりし所れ云
葉あつきとはしるしにてとりかへしより
四位のうれあつきはさくらの三重うさ
まかしとめる重の月をわりうつしより
んえくはくへし立よりし三のくちな
とおしなといふことはよかるへしは乾
のえんのまれまはかれあつきの事名目
まてあるへしは二月廿日さて志のひく
ふあひしことゆくて四門くまさ也給ひ

てとりくられはしふなりすつまくたく
とうきてんのおしきされんのまくは御
世ととりとしなひてりとりふくし
とのことなれは九のまそりゆんしとを
まへなりを扨こそ云の君も此井る女
はしさよいれをなりしのこと

りておくし

まし
れ